

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2019年9月20日

No.129

もくじ

- 1-2 改元を考える
その式…改元に従
わない人びと
- 3 最近の発掘調査
国衙の西側に大型掘
立柱建物跡を発見
- 4-5 NOTE
多摩川・過去～現
在の水族事情
- 6 府中の身近な昆虫絵巻
⑥大丸の河原にバッ
タ・オーライ
- 7 展示会案内 企画展
ちよっとむかしのく
らし～その4～
- 8 平成史に残る天文・宇宙
イベント
②月と太陽の天体
ショー！金環日食



正長3年銘板碑
(本町・安養寺蔵)

改元を考える

平成から令和へ。新しい時代の幕開けだと世の中は少しウキウキしているようです。時代によって人びとの〈改元〉に寄せる思いは異なっていました。地域に残るモノをとおして、〈改元〉について4回シリーズで考えていきます。

その式

改元に従わない人びと

左の写真は板碑という中世の供養塔です。正長3年9月6日の銘があり、1430年の造立とわかります。いや、ちょっと待ってください。正長3年は、本来存在しないはずです。正長2年9月、〈永享〉に改元されているのですから。どんな事情で旧年号を使い続けたのでしょうか。今回は、そんな話題です。

改元を考える

その武…

改元に従わない人びと

表紙の写真は、府中市本町にある安養寺が所蔵している板碑です。板碑は石造の供養塔の一種で、中世の東国、特に武蔵で盛んに造立されたことは、前号で述べました。

この板碑は、現存長 57cm で、それほど大きなものではありませんが、阿弥陀三尊を表す 3 つの梵字の間に地蔵を表す梵字を配置している点で、とっても珍しいものです。

しかし、ここで注目したいのは、「正長三年九月」の紀年銘です。正長 3 年は西暦 1430 年にあたりますが、実は前年の 9 月に〈永享〉に改元されています。つまり、この板碑は、改元されてから 1 年たっても旧年号を使い続けていたことを示しているのです。

そもそも、メディアが発達していない前近代において、改元の伝達には相応の時間一月一日を要しました。例えば、鎌倉幕府が自ら編纂した『吾妻鏡』をみると、朝廷から改元を傳達する詔書は 10 日前後で届いていて、その後、将軍による吉書始という儀礼を経て、東国社会へ改元が知らされていたことがわかります。しかし、1 年も伝達に時間がかかるとは、とうてい思えません。

実は、それには政治情勢が密接に絡んでいるのです。当時、京都を本拠とした室町幕府が政治を主導していましたが、幕府は東国を統治するために鎌倉に鎌倉府を設置していました。鎌倉府の長は鎌倉公方といい、室町将軍と同じ足利氏が任じられました。鎌倉府は設置当初こそ幕府と良好な関係でしたが、時がたつにつれ、対立すること度々という状況に陥るのです。

応永 35 年（1428）1 月、将軍を退いてからも実権を握り続けていた義持が亡くなると、弟の義教が籤で選ばれて、正長 2 年（1429）3 月に 6 代将軍に就任します。そして、9 月には後花園天皇の代始めにより〈永享〉に改元されます。



永享 2 年銘板碑（宮西町・長福寺蔵）
紀年銘部分のみが残る小片に、
「永享二 十月」と刻まれている。

ところが、義持の猶子となっていて、将軍職を熱望していた持氏は、義教の就任に不満を持ち、幕府・将軍との対立を強めていくのです。そして、対立姿勢を誇示するように鎌倉公方は旧年号〈正長〉を 3 年、つまり 1430 年まで継続使用するのでした。改元を公然と無視したわけです。安養寺所蔵板碑は、こうした歴史の物証といえます。

それでは、鎌倉府の勢力下にあった地域では、〈永享〉改元が知らされていなかったのでしょうか。そんなことはありません。確かに鎌倉府がこの時期に発給した文書は、〈正長〉が使い続けられますが、板碑を見ていると、永享 2 年銘を持つものも少なくないのです。東国といえども鎌倉公方に与する勢力・地域ばかりではなかったもので、当然というべきなのでしょう。

そこで、国立歴史民俗博物館が公開している東国板碑のデータベースで東京・埼玉の 1430 年を検索してみました。すると、正長 3 年は 21 基、永享 2 年は 29 基となり、意外なことに〈永享〉が優勢なのです。どうやら東国には鎌倉府を介さずとも改元が伝達されていて、地域社会では改元は周知の事実だったのでしょう。むしろ、政治的・社会的な背景や、昨今よく耳にする忖度が働くなどして、用いる年号を選択していた、と考えられそうです。

改元を無視する政治権力の存在もさることながら、それを知りながら旧年号と新年号を巧みに使い分ける人びとのたくましさに驚きを感じます。
(深澤靖幸)

最近の発掘調査

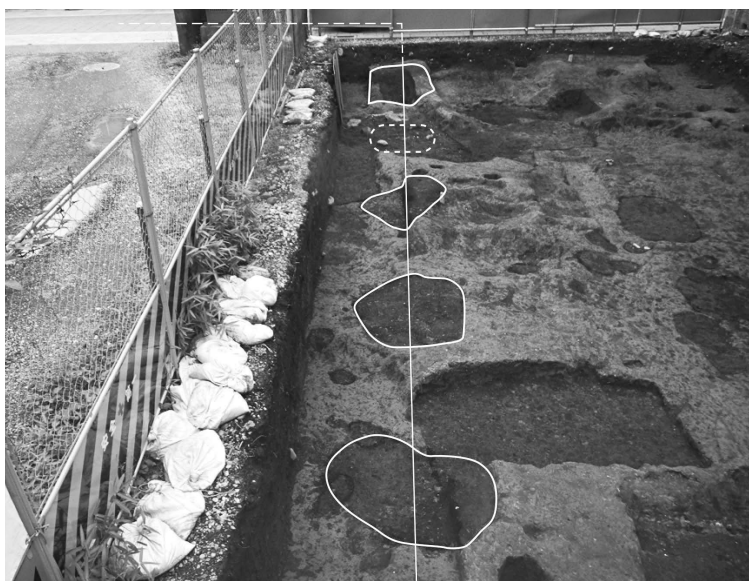
国衙の西側に

大型掘立柱建物跡を発見

本町一丁目

府中市ふるさと文化財課

野田 憲一郎



発掘された掘立柱建物跡の柱穴

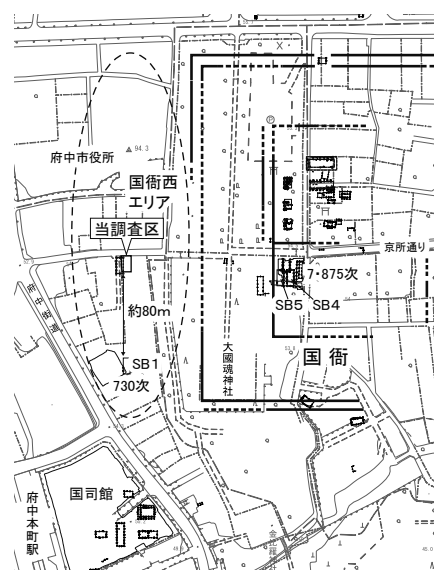
武蔵国の国衙は、大國魂神社境内から東側の範囲にあったと考えられています。これまでの発掘調査によると、国衙は二重の溝で囲われており、その中に国庁や官庁街の大型建物が整然と配置されていたことがわかっています。ところが、今年7月に行われた発掘調査で、国衙の区画外にも役所の建物に匹敵する大型建物が存在することがわかりました。

今回の調査地区は、国衙西辺の区画溝から西へ約 60 m離れた場所です。調査地区の西寄りに、掘立柱の柱穴 5 基が並んで見つかりました。長軸 1.2 m、短軸 1.0 mもある大きな柱穴です。建物の範囲は調査地区外へ及びますが、柱間が南北に 4 間以上で、柱穴と柱穴の間が 2.6 m離れていることから、桁行が 10.4 m以上もある大型の掘立柱建物であると推測できます。

柱間の寸法や柱穴の大きさからすると、この建物跡は大國魂神社結婚式場の調査（7・875 次調査）で見つかった大型建物跡（SB4・5）に類似しています。SB4・5 はともに 5 間、2 間の南北に長大な建物で、桁行が 13.5 mに及びます。まさに国の役所に相応しい建物です。

また、当調査地区から南へ約 80 m離れた調査地区（730 次調査）においても柱間の寸法が 3.1 mある大型の掘立柱建物跡（SB1）が見つっています。この柱穴は今回発掘された柱穴と同一線上に並んでおり、2 棟の建物は規則性をもって造営されているものと考えられます。この 2 棟の建物の間は未調査ですが、国衙の西側エリアには、区画の範囲を超えて役所の施設が建ち並んでいたのかもしれません。

これまで国衙西側では、奈良・平安時代の遺構がほとんど見つかっていませんでした。それは、後世の造成工事で遺構が削平されたためなのですが、今回の発見からすると、ここも役所のエリアとして庶民から隔離された空間だった可能性があるようです。



国衙周辺の調査状況



大田区調布堰で観察されたアユの遡上 写真提供：国土交通省京浜工事事務所

夏に開催した特別展「多摩川夏のいきもの・左岸オールスターズ」では、多摩川に生息する身近な水族を紹介しました。意外に多い水生生物に、感心する人もいたようです。府中の南縁を流れる多摩川は、水中から河原・土手に至るまで、多様な生物種を包括した貴重な自然です。但し、流域人口も多く、日常的に管理が施されることで、人工と天然が融合する特殊な環境でもあります。そんな多摩川に、一大転換期がありました。

▼ 落日の多摩川に消えた魚影

元来の多摩川は、清流に泳ぐアユを筆頭に、漁場として名を馳せていました。江戸時代にはアユが將軍家に上納され、昭和初期まで鵜飼も行われていました。ご承知のように、アユは孵化した仔魚が川を下り、河口近くの海で成長すると、ふたたび故郷の川を遡上して産卵します。かつての多摩川は当り前にアユが戻り、追隨して他の魚種も大変豊富でした。

「本府の巨流たる多摩川は水量豊富、水質また極めて清冽にして、古来よりアユの名産地としてあまねく東部人士の味覚をそそり、また遊漁者憧憬の的となり、マス、ヤマメ、ハヤ、コイ、ウグ

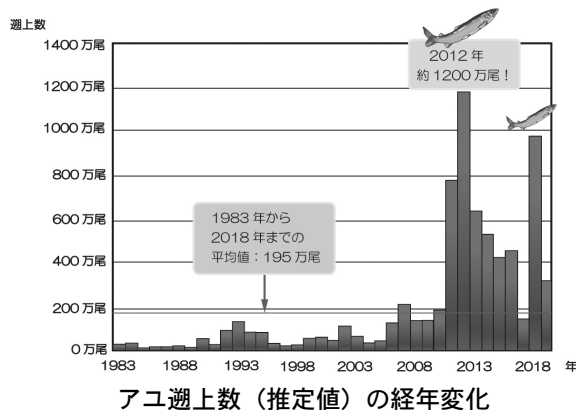
イ等の水族に乏しからずして冷水性魚族増殖にきわめて適したる河川なり」1928年、東京に水産試験場が創設された際、報告書に綴られた多摩川環境の件です。まさに良好な様を裏付ける内容と言えるでしょう。

昭和に入り、高度経済成長期を迎えると、多摩川の流域人口は増加し、その数は1958年の107万人から、1970年には197万人と、12年で倍となる勢いでした。住宅はもちろん、多くの工場等も建設されました。多摩川の水はさかんに利用され、生活排水・工業廃水はどんどん川に戻されました。1957年に完成した奥多摩・小河内ダムの運用や、羽村取水堰の稼働により、すでに中～下流に届く水は少なく、汚れは一気に加速したのです。堤防近くはドブの臭い、水面を覆う真っ白な泡・・・この惨状の中、生き残った魚は、コイやフナなど汚濁に強い種類だけでした。ただ、この中には背骨の曲がるもの、ヒレが変形するものが出現していました。無論、アユの遡上も途絶えてしまいます。大田区の調布堰ではアユの稚魚放流が続けられていましたが、あまりの汚れに陸へ跳ね上がったと言います。安住の地・多摩川の姿はもう存在しませんでした。

▼ 蘇える多摩川に帰還したアユ

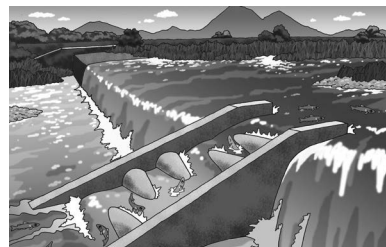
都市下水による汚濁を打破する鍵は1962年に誕生した東京都下水道局でした。但し、市街地の地下に下水管を張り巡らすには莫大な資金を要するため、最初の2年間は、多摩川流域の普及率が1%程度でした。しかし1971年以降、大幅増の資金を投じて建設が押し進められたのです。結果、有機物による水の汚れを示す数値は、中流域で1980年代に入り順調に減少しました。下水道が普及しても水質は変わらないと言う意見もあったようですが、処理水自体の水質を向上させることに成功した技術の勝利でした。

2000年代では、さらに数値は劇的に低下し、2001年にはついに、アユやサケ科も暮らせる環境基準に達しました。さあ、いよいよアユの帰還です。下流域の大田区調布堰では、水質が回復し始めた1975年から、ちらほらと遡上が見られるようになっていました。1983年から始めた都の水産試験場による遡上数調査でも、初年度の18万尾から2年目の25万尾と、上昇カーブを描きました。そして一時横ばい状況はあったものの、2012年には1200万尾を数えるほどに復活したのです。但し、1990年代にひとつの問題点が浮上しました。



それは数か所に及ぶ堰が障壁となり、アユが中～上流に上れない点でした。確かに下流でのカウントには著しいものがありましたが、実際府中をはじめとする中流域に帰って来る個体は少なかったのです。これを解消したのが魚道です。堰の両側に魚が通れるスロープを設置することで、アユのように海と川を回遊する種類にとっては大変有効なものになりました。特に多摩川は、「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル」の第1号河川として指定され、重点的な魚道整備が進め

られたのです。特定の生活型、特定の科に偏らない魚種を選び、各タイプに対応できるような魚道を目指し、紆余曲折を経てハーフコーン型という形状を編み出しました。今は多摩川ではもちろん、全国の川でも取り入れられている通り道の効果で、ついにアユも、他の魚も、中流域で多く見られるようになりました。



▼ 中流の多摩川にひしめく水族事情

アユも帰る現在の多摩川では、およそ80種の魚類を数えます。水生昆虫はゆうに200種を越え、都市の近くでこれだけ多種が生息する川は世界的にも大変珍しいようです。昔に近い自然の姿を取り戻しつつある多摩川ですが、防災や利便性重視の整備が常に成されています。本来の川は、瀬や淵と言った流れの強弱、底石の重なり、岸辺の凹凸など、モザイク的な空間です。これがダムや堰、護岸の造成により単純で安定した流れを生み、逆に生物が棲みにくい状況を作っています。反面、洪水防止のため、ほとんどが可動式となっている堰をアユの遡上期に合わせ開放することで、河口や下流域の水族が中流域まで上がっています。ハゼ類のスミウキゴリや、モクズガニ等はこれに該当し、最近では中流でもすっかりお馴染みの種類です。生態系において、河川管理の影響は一長一短ですが、加えて問題視されているのは、外来種の侵攻です。飼育魚などを多摩川に放すことで多摩川の外来魚は激増し、コクチバスやブルーギルに代表される北米産の魚を筆頭に在来種を駆逐する勢いなのです。

多摩川の汚濁から浄化、そして現在に至る諸々も、言わば川と人との葛藤から生じた事象です。1997年の河川法改正では、これまでの経緯を踏まえ、河川整備は環境保全を考慮するという新たな考えにシフトしました。しかしながら、一度崩れた自然を完全に再現することは困難で、良くも悪くも多摩川は変化し続けるのでしょう。どこまで管理の枠を広げられるのか、どこまで環境を守れるのか、人と多摩川が顔を突き合わせての議論が今後も続いていくのです。

府中の身近な

昆虫絵巻



⑥ 大丸の河原にバッタ・オーライ

夏から秋の入口にかけて、多摩川の河原ではバッタたちの飛び跳ねる光景が目に見えます。当館で開催する秋の観察会も、定番のメニューは河原の昆虫探しで、メインは数種類のバッタを追いかける趣向となっています。河原に生える丁度いい具合の草丈が、彼らにとっては最良の隠れ家です。我々が草を踏み込み前進すると、ピョンピョンと飛び出してくるのが、実に面白いのです。ただ近年、場所によっては、この棲みかにも変化が生じているようです。

現在の河原は、天然のレクリエーション施設という位置づけで整備が成されています。遊歩道やグラウンド、バーベキュー広場などとしての利用が高まり、生い茂った草原は短く刈られたり、消滅したりと様相が常に変わっています。もちろん全域ではなく、数か所の話ではありますが、去年まで観察出来た場所に今年は見当たらないと言ったケースも少なくありません。

博物館近くの大丸堰上手の河原も同様に整地され、以前のように草むらを飛び出すバッタの姿が少なくなりました。特にトノサマバッタは著しいような気がします。このバッタは飛翔力に優れ、一度の飛距離が長いので、生活には広いエリアが必要です。かつ、ひざ丈くらいの草が生い茂る原っぱであることも条件です。まさに河原はうってつけの環境なのです。子供たちには人気の的で、丸く凜々しい顔は初代仮面ライダーのモデルになったことでも有名です。別名ダイミョウバッタとも呼ばれ、体長は5～7cm、色は緑色と褐色の2タイプあります。これは育った環境が緑の多い場所か、土などの多い場所かで決まるようです。後ろ翅に紋や帯が無いのが特徴です。



日本では単独で生活することが多いのですが、中国やアフリカ大陸では、相当な数で現れることもあります。イネ科の植物を主食とする彼らにとって、河原は棲みかであると同時に、絶好のエサ場でもあるのです。夏の終わりのセミしぐれに混じって元気に跳び回る数多くの姿を、今一度大丸の河原で見たいものです。

河原のバッタでもうひとつ人気の種類は、ショウリョウバッタです。大型のもので10cm前後にもなる、日本で一番大きいバッタです。但し、大きくなるのはメスだけで、本種はオスとメスで極端に体長が異なることが特徴なのです。大きく育った成体が多く出現するのは、お盆の頃です。信心深かった昔の人は、先祖の魂がバッタに化身して戻って来たのだと思い、精霊バッタと呼んだそうです。また、オスが跳びはねる際にキチキチと音を発することからキチキチバッタの別名

もあります。トノサマバッタとは反対に、遠くまで飛べないため、比較的狭い範囲で生活しています。ゆえに原っぱが多少減少しても、わずかな草むらを見つけて生きていくことが可能です。堤防の斜面などは草が生えっぱなしの所も多いので、聖地かも知れません。体型は細長くスリムで、顔つきは、これまた

トノサマバッタに反して尖り顔。仮面ライダーとは程遠く、ゲゲゲの鬼太郎でお馴染みのネズミ男そっくりです。同所にいるオンブバッタにも良く似ているので、間違えられることもあります。

多摩川の河原は、川沿いに住む人々への防災整備を筆頭に、人々の憩いの場所として安全に利用できるための措置が取られています。やむを得ず草が刈られると、昆虫たちは棲みかを他所に移さざるを得ません。大局的には生物保全への配慮も含めた環境整備が成されているので、バッタの活動エリアが消滅しているわけではありません。小さなことではしょうが、元いた場所から消えるのが寂しい気がするのです。大丸の河原にカムバックオーライ！とバッタに呼びかけられるよう草原を再生することも、環境保全を加味した今後の河川整備の在り方だと思います。（中村武史）

ちよつとむかしのくらし ～その4～

11/9（土）～3/15（日）

会場：本館2階企画展示室



白黒ブラウン管テレビ

「テレビジョン（テレビ）」は、ご存知の通り映像と音声を広域に発信する機械です。日本では昭和14年（1939）から、その翌年に東京で開催される予定だったオリンピック（戦争激化のため開催中止）を中継することを目的として試験放送がはじまります。その技術が完成したのは戦後になってからで、昭和28年、シャープや松下電器（現パナソニック）が家庭用テレビを発売し、同年テレビ番組の本放送が開始されました。

ですが、高価すぎることから、当初は富裕層が購入するか、あるいは街頭テレビが設置された程度で、各家庭にすぐに広まったわけではありませんでした。昭和30年代前半、家にテレビを購入したら、近所の人が見せてもらいに来たという話を、府中でも聞いたことがあります。

昭和34年4月、当時の皇太子明仁親王（現上皇）と正田美智子さん（現上皇后）のご成婚パレードがテレビ中継され、家庭にテレビを普及させることに一役買ったそうです。前年11月の婚約発表からいわゆる「ミッチーブーム」が起こり、二人の動く姿を見たい人が増えたためといわれています。昭和30年代前半は好景気で「もはや戦後ではない」と言われた時代です。製造メーカーも改良・開発を続け価格が下がり、購入できる家庭が増えたという背景もありました。

上のイラストは、そうした時期に製造された白黒テレビをイメージしたものです。足をつけたり、テレビ台に乗せたりしたものが多くありました。当然リモコンはなく、チャンネルを回して放送局を変えるのが当り前の時代のテレビです。ブラウン管という装置を用いるため分厚く、重量感

がありました。家族団らんの時間に皆で囲めるよう、和室では床の間など比較的部屋の主要な場所に鎮座することが多かったといえます。

カラー放送が開始され、カラーテレビが発売されたのはご成婚の翌年、昭和35年のことでした。各家庭がカラーテレビを購入するきっかけは、その4年後の昭和39年に戦後復興をアピールして開催された東京オリンピックといわれています。

平成も終わり、令和の時代となりました。カラーテレビ登場から間もなく60年、それ以前の白黒テレビに至っては、もはや知らない世代が多数派になってきているようです。現在でも人びとのくらしは激変し、テレビに限らずくらしの道具類も変化し続けています。私たちが「ちよつとむかし」と考えてしまう数十年前のくらしでさえ、なつかしい、と思える人と、まったく知らずにかえって新鮮に感じる人がいるのです。

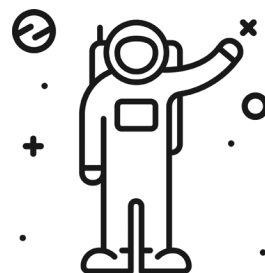
そこで今回も、そんなちよつとむかしにつかわれてきた生活に関する道具類の変遷やつかい方を、収蔵資料を通して振り返っていきます。むかしのテレビも、もちろん展示予定です。また、4回目となる今回は、定番の展示にあわせて、ちよつとむかしのスポーツをテーマにしたミニコーナーも計画しています。

さらに会場の隣では、テレビの普及とも関連の深い、オリンピックに関するミニ展「1964 東京オリンピックと府中」（10/5～令和2/9/6）を開催しています。府中を走った聖火ランナーのトーチやユニフォームの他、前回の東京オリンピックに関する資料を展示しますので、あわせてお楽しみください。（佐藤智敬）

平成史に残る天文・宇宙イベント



②月と太陽の天体ショー！金環日食



平成 24 年（2012）5 月 21 日、日本を揺るがす天体ショーが起こりました。その名は「金環日食」。「皆既日食」や「部分日食」という言葉を聞いたことがあっても、「金環日食」は、当時初めて聞いたという方も多かったかもしれません。「日食」とは、太陽－月－地球がほぼ一直線上に並んだとき、地球から見て月が太陽の前を通過することで、その一部または全部を隠してしまう現象です。隠され方によって下記の 3 種類に分類されます。

太陽の一部が月によって隠される「部分日食」、太陽の全部が月によって隠される「皆既日食」、そして太陽のほうが月より大きく見えるため、月のまわりから太陽がリング状にはみ出して見える「金環日食」です。

金環日食は、世界中でみると 1 年に 1 度あるかないかの頻度で起こりますが、日本では、昭和 62 年（1987）9 月 23 日以来の 25 年ぶり、さらに東京・名古屋・大阪などの大都市で見られるということで、多くの人々がその天体ショーを見ようと盛り上がりました。私も当時、金環日食が見られる場所まで移動しましたが、当日の天気はあいにくの曇り。祈るような気持ちで太陽が出てくるのを待ちました。そして、雲の隙間から運良く見る事ができたのです。その時、曇っていた影響もありましたが、風が強まり肌寒くなったことを覚えています。

月は地球の周りを回っている衛星ですが、普段の生活でそれを感じることはあまりありません。しかし日食の最中は、月が少しずつ動いていく様子を直接見る事ができ、その動きを実感することができます。「平成」の時代に日本で金環日食が見られたのは、たったこの 1 回だけです。私の中では、まさにオンリーワンでナンバーワンな天体ショーでした。

次に金環日食を観察できるのは、令和 12 年（2030）6 月 1 日の北海道地方。部分日食なら、

今年の 12 月 26 日に日本の広範囲で楽しむことができます。府中では、14 時 27 分頃から欠け初め、15 時 35 分あたりに食の最大を迎え、食の終わりは 16 時 34 分頃。ちなみにこの日、インドや東南アジアでは金環日食を見ることができます。

ところで、太陽を観察するときは、絶対に直接見ないようにしてください。太陽は強い光と熱を出していて、直接見てしまうと短時間でも目を傷めてしまいます。必ず日食メガネなどを使って安全な方法で観察するようにしましょう。日食メガネなどがない場合は、ピンホールを利用するのがオススメです。厚紙などの光を通さない紙に小さな穴をあけて、日食中の太陽の光を当てます。そして、地面や白い紙をスクリーン替りにして投影すると、太陽の光が太陽の欠けた形に映ります。この方法を用いると、直接太陽を見ることなく、安全に日食を観察できます。

博物館でも部分日食当日に観察会を予定しています。太陽観察用の特殊な望遠鏡や太陽投影板など、安全な方法で日食を観察します。令和元年の年末、月と太陽が織りなす日食を観察してみてはいかがでしょうか。（上野アイ子）



平成 24 年 5 月 21 日の金環日食
撮影地：埼玉県秩父市